

## 再び「内山牛松が物語る河童の絵展 一河童と言葉集一」より

現在展示している資料の一つに「河童と言葉集」があります。これは折々に、牛松さんが感じたままを書き留めた言葉のようですが、読んだ人に共感を抱かせる味わい深い言葉だと思えます。前号に引き続き幾つかをご紹介します。



- ・もうだめだ と思うと そこから だめになる
- ・三日坊主は 四日目になると 開き直る
- ・時は 人を成長させ 退化させる
- ・うそについて いる時程 言葉が多い
- ・意見が 同じなのではなく 利益が 同じなのだ

## 文芸館の四季

前号でご紹介したブラシノキの花より少し遅れて、建物南側の角に生えているシロザクロの花が咲きました。この木は志賀直哉邸にあった実を藤枝静男が持ち帰り、種を蒔いたところ、発芽し成長したものだそうで、氏の随筆の中にも登場してきます。

白と云っても実際は薄クリーム色で、実も黄色っぽい色をしている。

十年ほどまえ志賀直哉氏が「珍しいからと云ってこのあいだ植木屋が持ってきてくれたんだ」と喜んで見ておられたが、昭和三十九年の十一月一日にうかがうと客間の南側の間近い低い塀の前に大きい実をいっぱいにつけていた。氏は満足そうな顔をして私の注意をうながし「うまいから持って帰って食べてみたまえ」と云われて、鉢を鳴らしながら大きめの二個を選んで枝のまま切って下さった。私は浜松に帰るとその甘い実を一個食いつくしたのち、種を乾かして蜜柑箱にまいた。(略)

私の蒔いた種は、一年して無数の芽が出たので丈夫そうなを選んで二回移植したのち鉢に移し、二年して四〇センチばかりに伸びたところで四本を庭に二本を故郷の家に植えて、一本を弟にやり二本は鉢のまま志賀さん方に持って行った。その次うかがうと「あれは瀧井と網野さんにやった」と言われた。

家の玄関前に植えた二本が、高さ三メートルほどに育ったと思うと昨年になって急に沢山の花をつけ、続いて細い枝が地に垂れ下るほど沢山の実をむすんだ。そのころから志賀さんの身体の衰えがひどくなりはじめたことを聞き、またごく稀にうかがって客間のベッドに静かに寝ておられる姿を拝見したりしたので、家に帰って白柘榴の実がだんだんにふくらんでくるのを見るたびに、早くこれを切っておめにかけてたいと願わぬことはなかった。その一粒二粒を口に入れて微笑される場面を空想したが、しかし正直に云うと「もうそんなことは面倒になった」というふうにはチラリと見て首をふられる様を心細く思い浮かべることの方が多かったのだ。そのころはもう入院されていた。(略)

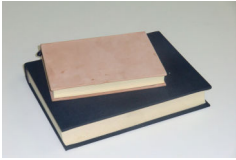
『藤枝静男著作集第一巻「白柘榴」』より



このシロザクロを藤枝静男も眺め、更には「小説の神様」と呼ばれた志賀直哉にまで行き着くのだと思うと、この木そのものが、近代の文学史を語り継ぐ語り部のような気がしてきました。

## お知らせ

- 7月15日から募集が始まる講座のお知らせをします。「短歌入門講座」「文学講座(秋)」「大人のための絵本づくり講座」、子供用として「夏休み額縁を作ろう」(小3～6年生対象)です。申込み方法についてはチラシをご覧ください。
- 村木道彦氏の講演会申込みも7月15日から受付となります。



## 浜松文学紀行 10 (浜松と井上靖 II)

### 井上靖、浜松中学の受験に失敗、浜松師範付属高等小学校へ

井上靖が大正9年2月、湯ヶ島小学校から転入した浜松尋常高等小学校は、明治6年開校の伝統校である。4年下に映画監督の木下恵介が在籍していた。昭和20年6月18日の大空襲で校舎もろとも灰燼に帰してしまったので、成績その他一切の記録は残っていない。

おかのおばあさんの死によって、私は小学校六年の三学期に、父の任地浜松の元城小学校に転校した。通学一か月程で浜松中学を受験したが、落第した。当時も受験難の時代で、四人に一人ぐらいの競争率だった。それに田舎の小学校から来た私は、自分ながら学力がひどく落ちていることを認めざるを得なかった。それから一年間、浜松師範学校の付属小学校の高等科一年に通った。高等科一年は全クラス、中学受験に失敗した連中で、授業は受験予備校の観があった。家は町中にあったが、私は毎日三十分ほどの時間をかけて、鹿谷公園という丘の公園を突切って通学した。雨が降った時だけ、途中から郊外電車に乗った。(「過ぎ去りし日々」)

靖少年が時々利用した電車は浜松鉄道の軽便電車で、当時の元城駅はホテルコンコルドの建っているあたりにあった。亀山トンネルは今も健在で、トンネルから浜松市立高女(現市立高校)、浜松中学校(現浜松北高校)までの旧線路が現在散歩道になっている。トンネルの手前5.60メートル余北側が、鹿谷公園である。現在は市の駐車場として使われている。



亀山トンネル

浜松師範学校は大正4年、名残町(現布橋3丁目)に開校した。戦後静岡大学教育学部浜松分校となり、昭和40年静岡に統合、45年現在の静岡市大谷に移転した。跡地にはその後静岡県立短大が入り、現在は浜松学院大学・短大の校舎になっている。

いる。靖が通った付属高等小学校は、昭和23年小学校と中学校に分かれた。

私は付属の高等科に通うようになってから真剣に勉強した。真剣に勉強しない限りは入学試験にパスできないばかりか、大体級友たちにもついていけなかった。私は毎日のように補習授業を受け、暗くなってから家へ帰ると、夕食もそこそこに、あとは自分の小さい部屋に閉じ籠って机に向かった。

母は毎日補習授業に於て行われる模擬試験の答案を覗きに来ては、  
「困るはね。田舎の子は」  
と言った。

そう言われても、私は返す言葉はなかった。実際にいつも半分もできなかった。私は今考えてみて、自分の一生で本当に真剣になった時期があったとすれば、この浜松での一年間ではなかったかと思う。(「帽子」)

この付属高等小での「勤勉」の一年間がなかったら、後年の作家井上靖は多分存在しなかったと思われる。